



図203 遺跡の位置
5万分1地形図「新潟」

牛道遺跡 江南区曙町二丁目・城所

牛道遺跡は、亀田砂丘から南に約二〇〇メートル離れた沖積地にある。標高は約二メートルである。昭和四十（一九六五）年ごろにナシ畑の根を掘り起こした時に発見された。範囲は南北約一八〇メートル、東西約五五〇メートルと推定されている。現在は、遺跡を東西に横断する形で国道四九号横雲バイパスが通り、バイパス南側は水田が広がっている。

平成七（一九九五）年、バイパス建設に伴い新潟県教育委員会が六八〇平方メートルを発掘調査し、平安時代の耕地を主とする遺跡と分かった。出土遺物の時期は、九世紀末から十世紀初頭の短期間であり、存続期間が五〇年足らずの集落の耕地と思われる。

発掘調査では、耕作土を取り除くと、そのすぐ下から畑の跡や、井戸などが発見された。畑の跡は、長さ一〇メートル、幅二〇〜五〇センチメートル、深さ一〇〜二〇センチメートルの溝状小溝（畝状小溝）として残っていた。数条を単位として同じ方向に平行して並んでいた。井戸は、小さいもので直径約一メートル、深さ約一メートル程度、大きいものでは直径約三メートル、深さ約一・五メートルで



図204 牛道遺跡を通るバイパス



図205 発掘区の景観 新潟県教育委員会提供

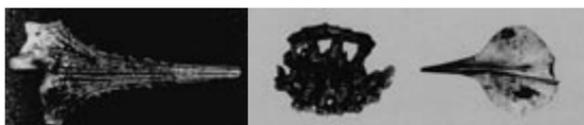


図206 魚骨 左、トゲウオ科 中、サケ属 右、アジ科
新潟県教育委員会提供

あった。水溜みずだめに大きな曲物まげものを据えた井戸や、掘ったときに豊富な湧水を祈って供え物をし、また埋めるときも供え物をして土を埋めた様子がかがえる井戸もあった。

発掘地には見栄えのする遺構はなかったが、井戸から出土した自然遺体の分析で、当時の作物や食べ物があった。種実の分析で同定された栽培植物は、稲のほかに、大麦・麻・桃・ナ

ス・ヒヨウタン類・ウリ類であった。食用果実では、クワ属・クリ・オニグルミ・トチノキ・ブドウ属・サクラ属が同定された。また、魚骨の分析では、イトヨやトミヨなどのトゲウオ科が最も多くて、コイ科のほかに、アジ科・サケ属も同定された。魚骨は焼けていたので、焼き魚にされたものが発掘地で食べられ、骨が捨てられたのであろう。トゲウオ科の食用が古代遺跡で確認されたのは、国内で牛道遺跡が初例である。

調査では土師器はじき・須恵器すえきも多く出土しているが、住居跡は発見されていない。調査地の北側にある自然堤防の微高地に居住地があったのであろう。